随想

山々の導き

愛知淑徳高等学校 副校長
数学科 教諭
石丸正樹

愛知淑徳学園に就職した年から毎年、学校行事としての夏山登山とスキー学校に参加していました。飛騨出身でスキーは身近でしたが、登山の魅力は未知でした。行事に参加して、自分の登山・スキー技術の未熟さを痛感しました。形から入るタチなので、可能な限り書籍や各種資料を集め、自分の技術に見合い最良と考える用具を年々更新する羽目になりました。

技術書以外は優れた書籍の少ないスキーに比べ、登山には、内外の登山家や小説家による著述が膨大にありました。ヒマラヤ登山をはじめとする、自分には決してたどり着けないレベル、想像を絶する過酷さの中で苦闘する人間の姿と、超然として人知の及ばない自然の雄大さに魅了されました。残すは実践あるのみです(笑)。

スキーに一人で行くことは皆無でしたが、プライベートでの登山はいつも単独山小屋泊でした。当時の山小屋は個人客ならば予約も不要で、お盆前後の帰省に合わせて、思いつきで二・三日の行程を加えることも可能でした。定番の燕泊・槍泊の縦走。夜行で上高地入りして前穂・奥穂泊・北穂・大切戸・槍泊の縦走。夕方新穂高温泉からロープウェイで西穂山荘へ、翌朝4時起きで西穂・ジャンダルム・奥穂から一気に新穂高まで下ったりもしました。いつも難易度は控え目で、体力的にも無理のない山行でしたが、技術だけでなく自分の存在ともじっくり対話できる貴重な時間となりました。